

目次

- はしがき クリステイーン・グロスロー 11
- はじめに 17

1 伝統から“解放された”時代 21

わたしたちは本当に自由を手に入れたのか
トロッコ問題など考えても意味がない
「ありのままの自分」を受け入れるな

2 世界じゅうで哲学が生まれた時代 32

孔子とソクラテスとブツダの闘いは同じだった
日々のパターンを修正して世界を変える

3 毎日少しずつ自分を変える——孔子と〈礼〉〈仁〉

40

感情をむき出しにしない

いつものやり方をちよつと変えてみる

〈礼〉を通して新たな自分を見つける

「愛してる」も儀礼

「本当の自分」を探してはいけない

〈仁〉はまわりに伝染する

孔子なら困っている友人をどう助けるか

〈礼〉のレパートリーを増やす

小さいことから始める

4 心を耕して決断力を高める——孟子と〈命〉

77

勤勉が報われるとはかぎらない

合理性でも勤でもない、第三の意思決定モデル

子どもが井戸に落ちたらどうするか

理性でも感情でもなく、「心」で決断する

人生の大きな決断で失敗するのはなぜか
どうすれば自分で〈命〉を変えられるか

5 強くなるために弱くなる——老子と〈道〉

113

〈道〉とは探すのではなくつくるもの
子どものようなしなやかさを保つには
横柄な上司がいたらどうするか
本当に強い人はだれか
相手が弱るまで待つ
気づかれずに相手を変化させる

6 まわりを引きつける人になる——『内業』と〈精〉〈気〉〈神〉

149

主体性とは自己を主張することではない
スポーツ観戦時の高揚感はどこからくるのか
人間は〈精〉〈気〉〈神〉をすべて兼ね備える
ポジティブな感情も有害になりうる

体によいことは、感情にもよい

駐車で車をぶつけられたらどうするか

自分のエネルギーで人を引きつける

7 「自分中心」から脱却する——莊子と〈物化〉

174

魚はただ〈道〉に従って泳ぐ

〈道〉に従わないのは人間だけ

自発性を訓練する

自分を邪魔する理性から自由になる

第三者がいれば散歩も修行になる

なにかあってもおもしろがって受け入れる

人生を最大限に生ききる

8 「あるがまま」がよいとはかぎらない——荀子と〈ことわり〉

200

自然崇拜は有害だ

人間は世界に〈ことわり〉をもたらず

素のままの自分を出してはいけない
人間は自然を改良する
問題が起きたら直せばいい
今あるものをよくする

9 世界じゅうの思想が息を吹き返す時代

223

「伝統」は誤解されている

東洋思想は西洋で曲解されている

わたしたちには世界を変えるチャンスがある

謝辞 241

参考文献と推薦図書 245

はしがき

クリスティーン・グロスロー

二〇一三年のさわやかな秋晴れの朝、わたしはハーバード大学で中国哲学の講座を聴講した。『アトランティック』誌に記事を書くためだ。というのも、この講座はアメリカ人にはなじみの薄いテーマの学部授業にもかかわらず、いかにも学生受けしそうな経済学入門とコンピューターサイエンスに次いで、学内で三番目の人気を誇るといふからだ。

壇上に立ったのはマイケル・ピュエット教授。長身で精気にあふれ、年のころは四〇代後半だろう。「ハーバード白熱教室」で知られるサンダースシアターに集まった七〇〇人を超える学生に熱く語りはじめた。人を魅了せずにおかないと評判の教授の講義はちよつと変わっていて、講義資料もスライドもない。毎回、教授が五〇分間ひたすら熱弁をふるう。学生に与えられる課題は、古代の哲学者が残したことば——孔子の『論語』、『老子道徳経』、『孟子』など——を英訳で読んでくることだけ。中国史や哲学についての予備

知識も興味も必要ない。ただ、中国の古典に虚心に向き合う気持ちがあればいい。この講座は、毎年、最初の授業で教授が大胆な約束をすることでよく知られる。「中国哲学と真摯に向き合うなら、きつときみの人生は変わる」

わたしは、ハーバード大学で東アジア史の博士号を取得したし、大学院生のときには学部生に中国哲学を教えてもいた。わたしにとってなじみのない題材ではない。ところが、この日、そしてつづく数週間にわたって講座を聴講するうちに、中国哲学の概念にわたしの知りえなかった新奇な息吹がもたらされるさまを目の当たりにすることになった。マイケルは学生に対して、たんに古代哲学者の思想と格闘するだけでなく、自分自身や自分の生きる世界についての根本的な前提を問いなおしてみよう求めていた。

ハーバード大学の講座にとどまらず、マイケルは世界各地の大学や機関でも中国哲学について講演している。どこで話しても、講演後はかならず聴衆に取り囲まれる。自分自身の人生や現実の問題、たとえば、人間関係や仕事や家族内の葛藤に今回の話を生かすにはどうすればいいかぜひ知りたいという人たちが。聴衆は、中国の古典思想を知ることが、幸せで有意義な人生のあり方を新鮮な目で見つめなおすきっかけになることにはたと気づく。これまで真実だと思いついてきた大半のものと食いちがうものの見方だ。

そのような見方がよりよい生き方につながったという人は多い。マイケルの学生たちに話をきくと、中国哲学を知って人生ががらりと変わったという実例がいくつも出てくる。

人間関係についての考えが変わり、今では、ごく小さな行動が自分にもまわりの人にも波及効果をおよぼすと意識するようになったという学生もいる。ある学生は言う。「ピュエツト教授は、まわりの世界とのかかわり方や、自分の感情との向き合い方に別の可能性があることを見せてくれました。それに、自分に対してもほかの人に対しても、これまで感じたことのなかった穏やかな心のもちようがあることも」

将来さまざまな分野でリーダーになるべき立場にいる有能な若者たちから、中国の古典思想のおかげで人生を左右する大きな決断への向き合い方や生きる道筋がいかに変わったか聞くことができた。選んだ道が金融だろうと、人類学だろうと、法曹界だろうと、医療だろうと、若者たちはそれまで教わってきたものとは異なる手だてと世界観を身につけ、人生の意味をとらえなおし、人生の無限の可能性を感じとっている。ある学生のことばを借りよう。「どうも人は、地位でも居場所でも、なにか究極の目標へ向かって日々を積み重ねて、夢の完成まで階段をのぼっているような気になってしまふところがありますよね。でも、この講義で学んだのは、生き方を変えれば、想像もしなかった可能性に目を向けられるようになるということなんです」

学生の人間形成を方向づけるのは、古代哲学の文言だけではない。マイケル自身がインスピレーションの源だ。謙虚で、思いやりがあり、学生が大成するよう尽力することで知られる。数十年にわたって中国思想に没頭するなかで身についた特質だろう。「教授は中

国思想の教えを完全に体現しています」と話す学生もいる。

中国哲学が、それを学ぶ者にこれほど強烈な影響を与えるのはなぜだろう。「自己を受け入れる」とか、「自己を見つける」とか、手順に従って特定の目標を達成するといった観念とは無縁の思想だ。そればかりか、そうしたものは正反対といえる。具体的でもなければ、決まったやり方もないし、大仰でもない。思いもよらない、まったく予想外の形で土台からすべて変わるということだ。ある学生は、生まれつき身に染みついていると思ひ込んでいたことがらが本当はそうでないと感じただけで、どれだけ心が自由になるか話してくれた。「新しい習慣を身につけて、自分のあり方を変えることは、本当に可能なんです。世の中をどうわたっていくか、世界にどう対応するか、他人とどう接するかは変えていける。わたしが学んだのは、習慣、つまり〈礼〉のもつこの力に習熟すれば、勝手に自分を枠にはめて無理だと思っていたものごとでも成し遂げられるということです」

わたしたちは長いあいだ、まちがったレンズを通して中国思想を見てきた。「伝統的な」世界と切り離せない古代の思想であり、そのため、現代のわたしたちの生活には時代遅れだと考えがちだった。しかし、学生たちが証言するとおり、古代の哲学者の教えは、わたしたちが当たり前のように信じてきた通念に疑いをいだかせる。世界とどう向き合うか——他人とどうつき合い、どのように決断をくだし、人生の浮き沈みにどう対処し、どのように他人を感化しようと試み、人生の送り方をどう選ぶか——についての教えは、二

〇〇〇年前と変わらず現在も意味をもちつづけている。むしろ、かつて以上に重要になっている。

マイケルとわたしは、中国哲学がすべての人の心に訴えかける力をもっていると思ったり、そのようなしだいでこの本は誕生した。読み進めるうちに、中国哲学の教えがいかにきみ自身やきみの将来について見つめなおす可能性をひらいてくれるか知っていただけると思う。

はじめに

孔子、孟子、老子、荘子、荀子。よく聞く名前もあれば、あまりなじみのない名前もあるかもしれない。一人は、官僚出身の師匠で、小集団の弟子の養成に生涯を捧げた。別の一人は、各地を遍歴して諸国の君主に遊説した。死後、神格化された思想家もいる。古代の思想家たちの生涯や著述は、今のわたしたちの目には漠然として、現代の生活とかけ離れているように見える。

なんとといっても、二〇〇〇年以上も前に生きていた中国の思想家が、生きることについてわたしたちにいったいなにを教えられるというのだろう。たとえ古代の思想家に思いをはせることがあったとしても、思い浮かぶのは、調和や自然について害のないありきたりのことをとうとうと弁じる泰然自若とした賢人くらいにちがいない。一方、今日のわたしたちは、伝統から解放された現代的で活発な生活を営んでいる。わたしたちの価値観、道

徳観、科学技術、文化的な前提は、古代の思想家とはまったく異なっている。

では、もしこう聞かされたらどうだろう。それぞれの思想家が、どうすればより善良な人間になり、よりよい世界を築けるかを考えるうえで、直観とは根本から食いちがう視点をもたらしてくれるとしたら？ 思想家たちのことばと真摯に向き合うなら、古代中国のすばらしい文言に込められた思想の力によって、きみの人生が一変するとしたら？ じつは、これこそがこの本の中心テーマだ。わたしたちとよく似た問題と格闘してきた古代中国の思想家の教えは、よい人生を送る方法について斬新な視点をもたらしてくれる。

ほとんどの人は、自分の心をのぞき込み、自分が何者かを知り、自分の人生がどうなるべきかを決めるのはいいことだと思っている。だから、どの職業が自分の個性や気質にもっともふさわしいかと思いをめぐらし、どんな相手が自分に似つかわしいかと思案する。そして、本当の自分や、就くべき職業や、運命の相手が見つければ、充実した人生を送れるものと信じている。本当の自分をはぐくみ、幸せと繁栄と自己実現のための計画をまっとうしようとする。

わたしたちに自覚があろうとなかろうと、よい人生を築く方法をこのようにとらえるようになった起源は歴史にあり、とりわけ一六世紀のカルヴァン派の思想に根ざしている。予定説、「選ばれたる者」、そして、神は個々の人間がまっとうすべき計画をあらかじめ定めているといった観念だ。カルヴァン派は、儀礼を型どおりで中身がないものと見なし、

儀礼に従うことを否定して、人の上に立つ神への心からの信仰を強調した。今のわたしたちは、もはや予定説や選ばれたる者という次元でものを考えることはないし、なかには神さえ視座にない人もいる。けれども、われわれの現行の思考は、大部分がこうした初期プロテスタントの考えを引きずっている。

今や多くの人は、一人ひとり特別な個人であり、おのれを知っていて当然だと考えている。自分は本来の自分であるべきで、人の上に立つ神ではなく、むしろ自分自身のなかに見いだした真実に忠実であるべきだと考えている。わたしたちは定められた自己にふさわしい生き方を志す。

しかし、人生を向上させるはずのこの信念が、実際には枷かぎになっているとしたら？

哲学というと、抽象的なものと見なされることが多く、役に立たない概念とさえいわれる。けれども、この本で紹介する思想家たちの強みは、いつも具体的に平凡な日々の暮らしの場面を通して教えを説いた点にある。どの思想家も、より大きな変化が生じ、充実した人生がはじまるのは、そうした日常レベルだと考えていた。

これからこの思想家たちを掘りさげていくなかで、ぜひ、きみがもつとも大切にしている観念を問いなおしてみてもらいたい。すくと腑に落ちる思想もあれば、そうでない思想もあるだろう。書いてあることすべてに賛同してもらおうと思っっているわけではない。自分の思想とかけ離れた思想に触れるだけで、よい生き方についての自分の想定が、何通

りもある想定の一つにすぎないと気づけるようになる。そして、いったん気づいてしまうと、昔のままの人生にはもうもどれない。

1 伝統から “解放された” 時代

人類は一九世紀まで、いわゆる「伝統的社会」に生きていた——このような歴史観は、もはや社会通念となつてゐる。伝統的社会では、人は常になにをなすべきか指図された。だれもが既存の社会構造に生まれ落ち、それによつて人生が決まる。小作人に生まれれば小作人のままだし、貴族に生まれれば貴族のまま生きる。生まれた家によつてどれだけの金と権力をもつかが決定づけられ、そのため、誕生したその日から人生の道筋は定められている。

この話にはつづきがある。一九世紀のヨーロッパで、人はようやくこの呪縛から解放された。ここではじめて、すべての人が自分たちは理性的に思考できる個人なのだと思つた。人間はみずから決断をくだし、自分の人生をコントロールできる。理性のある生きものとして、かつてない無数のチャンスをつくり出せる。社会通念によれば、この気づきか

ら近代世界が生まれたことになっている。

しかし、因習を打破した人々がいる一方で、そこから置き去りになった文化もあった——と、わたしたちは思っている。多くの人にとって古代中国は伝統的社會の極みであり、そこでは階層と序列の世で生きるために厳格に規定された社会的役割に従うことが求められる。

だから、そのような世界から学べることなどないに決まっている——。

いうまでもなく、伝統的社會というもの、とくに中国に対するこのような解釈は、憧憬の念をとまなうことがある。たとえば、つぎのような具合だ。わたしたちは今はもう互いが疎遠になっているが、伝統的な世界の人々は自分たちを宇宙と調和して生きる者としてとらえていた。わたしたちは自然界から離脱し、自然を思いどおりに支配しようとしているが、伝統的な世界の人々は自然の摂理に従って生きようとした。

伝統的な世界をこのように感傷的にとらえるのは、因習を打破して見ないと見くたすのと同じで、そこからはやはりなにも学べない。たんに郷愁を誘う骨董品かにかのように扱っているだけだ。博物館でエジプトのミイラを見て、「こいつは興味深い」と思う。古代中国の出土品を見て、「これはまた珍妙な」と思う。見れば好奇心をそそられるが、その時代や、それが象徴する世界にもどりたいとは思わない。伝統的な世界で生きたいとも、そこから教訓を得ようとは思わない。近代的でないからだ。ようやく世界を解き明かした

のはわたしたちであって、彼らではない。

けれども、これから見ていくとおり、わたしたちの「伝統的な」社会に対する固定観念の多くは見当ちがいだ。そして、過去から学べることはたくさんある。

わたしたちの歴史観がはらむ危険性は、人類の歩みの大部分をとるにたりないものとしてかろんじる風潮をまねいてきたことだけではない。現在支配的な思想だけが、人間にみずから人生を決定する力を与えたと考え、だから現在の思想だけが正しいと思い込んでしまうきらいがある。

しかし実際は、どうすれば自分で人生を切りひらけるかについてはこれまで幅広い考え方が存在してきた。それを受け入れれば、「近代」とされるものの正体が見えてくる。近代とは、特定のときと場所をもとにつくられたたくさんのお話のうちの一つにすぎない。思い込みを捨てれば、そのあらゆる思想に触れられるようになる。それは同時に、わたしたちのあいだに長らく流布している通説を問いなおすことでもある。

わたしたちは本当に自由を手に入れたのか

わたしたちの多くは自分が本質的に自由だと考え、祖先にはそのような自由はなかったと思っている。一九世紀に伝統的な世界から離脱した西洋人は、その後、世界をどう編成

するか自分で決定する力をついに手に入れた。人々は二世紀を費やして、競争するさまざまな政治社会思想に取り組んだ。社会主義、ファシズム、共産主義、民主資本主義などだ。そして、一つを残してほかの思想の威信が失墜したあと、ついに「歴史の終わり」にたどり着いた。一九八九年にベルリンの壁が崩壊するとともに、世界に秩序をもたらす正しい方法、すなわち人類の繁栄と成功を実現するのにもっともふさわしい方法として、新自由主義が勝利をおさめたかに見えた。

しかし、だとすれば、先進世界で急増している不満や自己中心主義や不安をどう考えればいいのだろうか。わたしたちは勤勉が成功につながると教わるが、それでも、貧富の格差は急速に拡大し、社会的流動性は低下している。生活はありとあらゆる夢のようなすばらしい技術によって快適になり、医学はかつてない進歩を遂げたにもかかわらず、わたしたちは恐ろしい規模の環境上、人道上の危機に直面している。数十年を経て、わたしたちの大きいなる楽観主義は影をひそめた。もはや、世界を構築してきた自分たちのやり方に以前ほど自信がもてなくなっている。

では、わたしたちはどれだけのことを解き明かしたといえるのだろうか。未来の歴史学者は現代を振り返って、繁栄と平等と自由と幸福の時代と考えるだろうか。それとも、二一世紀初頭を無頓着の時代と定義するだろうか。人々が不幸で満たされなかった時代、危機の増大を目の当たりにしながら、実現可能な代案がないからとなんの対応措置もとらな

った時代だったと。

本書で紹介する中国哲学の文言は、この無頓着の時代に代替案を示してくれる。しかし、代替案といっても理路整然とした政治社会思想などではなく、たとえば民主主義に取ってかわるものとは違う。むしろ、直観とは相いれない、自己や、世界のなかでの自己の役割についての観念だ。その多くは、なんらかの包括的な思想体系に従って生きるという考え方に対抗するなかで練りあげられた。

およそ紀元前六〇〇年から紀元前二〇〇年にかけて、ユーラシアのいたるところで哲学運動や宗教運動が起こり、人類が繁栄するための多種多様の展望がひらけた。のちに枢軸時代と呼ばれるようになるこの時代には、ギリシアで発展した思想の多くが中国でも出現したし、その逆の場合もあった。実際、この本でも触れているが、今日の西洋で一般にいきわたっている信条とそっくりなものが中国でも生まれていた。ところが、中国ではそのような思想は敗北し、これに対抗してまったく異なる行路でよい人生へ向かうことを主張する別の思想が出現した。

ここで取りあげるとどんな概念も、「西洋」と「中国」を対立させて、これは中国式のものの方だというところをすべきではないし、同じように、伝統的な思想と近代的な思想を対立させて考えるべきではない。じっくり掘りさげるなかで、人々が近代のずっと以前から世界に秩序をもたらす最善の方法を議論してきたこと、さらには、よい人生を送る

方法を考えるうえで、真にかわりになりうる思想があることがわかるはずだ。

トロツコ問題など考えても意味がない

西洋では幸福と繁栄のために計画を立てるとなると、理性に頼るよう教えられ、慎重に計算すれば解答に行き着けるとだれもが信じている。人生の不確実さに直面しても、感情や偏見を乗り越え、自分の経験を測定可能なデータに落とし込めば、チャンスを自在にあやつったり運命に逆らったりできると信じることで安心を得る。道徳倫理上のジレンマに取り組むとき、もつとも人気のある方法を見てみよう。象徴的な架空の状況を想定し、徹底して理性的に考える。よく知られるトロツコ問題では、まず、操車場にいるところを想像する。そこへ暴走したトロツコが近づいてくる。このままでは線路上にいる五人がひかれてしまう。ポイントを切り替えればトロツコを別の線路に向けることができるのだが、その線路上にはもう一人が横たわっている。はたしてきみは、トロツコがそのまま五人に突っ込んでいくにまかせるだろうか。それともポイントを切り替えて五人を救い、横たわっている一人をひき殺す結果をまねくほうを積極的に選ぶだろうか。

どうするのが正しいことなのか。

この種の問いは、生涯をかけるほど哲学者や倫理学者を夢中にさせている。関連する論

文が数えきれないほど発表されているし、書籍さえ出版されている。このシナリオによって、意思決定を単一のデータと択一の決定に単純化できる。意思決定はこのようになされるものだと、わたしたちのほとんどが思っている。

こういった思考実験は古代中国でもおこなわれた。ところが、本書の思想家はそれほど興味を示さなかった。よくできた知的ゲームではあるけれど、朝から晩までこのようなゲームに興じて、日々の平凡な暮らしをどう生きるかになんの影響も与えないと見切りをつけ、まったくの役立たずと断じた。

自分は人生をこう生きていると頭で考えていても、それは実際の自分の生きざまではない。自分はこんなふうに決断をくだしていると頭で考えていても、それは実際の自分の流儀ではない。ある日、ふと気づいたら操車場において、突進してくるトロツコにだれかがひき殺されそうになっているとしても、きみがどう対応するかは理性的な計算などとはいっさい無縁だろう。このような状況では感情や本能が支配権を握る。感情や本能は、そこまです反射的でない決断をくだす場合にも指針として働き、自分ではとても慎重に理性的に決断しているつもりするとき——夕食はなにがいいかな？ どこに住もうかな？ だれと結婚すべきかな？——でさえ影響をおよぼす。

中国の思想家は、このようなやり方に限界があると気づき、別の方法を模索した。本書の思想家たちにとって、その答えは、本能を研ぎ澄まし、感情を鍛錬し、たえまない自己

修養に励むことであつた。そうすれば、やがて、重大な局面であれ、ありふれた場面であれ、個々の具体的な状況に対して倫理にかなつた正しい反応ができるようになると思つた。そのような反応は、まわりの人の好反応を引き出すことにもなる。こうしてあらゆる出会いや経験が、新しいよりよい世界を積極的につくり出すチャンスになると思想家たちは説いた。

「ありのままの自分」を受け入れるな

以前の貴族階級の宗教組織が崩壊したあと、枢軸時代の人々は、新たに真実と意味を与えてくれるものを探しはじめた。同様に、今の時代も、わたしたちはこれまでの窮屈な考え方を打破したと感じ、新たに意味を与えてくれるものを探している。高次の真理を内面に求めよと教えられることがとみに増えた。自己実現者の目標は、自己を見つけることであり、内なる真に従つて自己の人生を「忠実に」生きることだとされる。

これが危険なのは、だれもが自分の「真」の姿を見ればそれとわかるはずだと信じ、その真実に従つて人生を規定してしまうことにある。自己を定義することにこだわりすぎると、ごくせまい意味に限定した自己——自分で強み、弱み、得手、不得手だと思つていること——を基盤に未来を築いてしまう恐れがある。中国の思想家なら、これでは自分の可

能性のほんの一部しか見ていないことになると思うだろう。わたしたちは、特定のときと場所であらわれる限られた感情だけをもって自分の特徴だと思ひ込み、それが死ぬまで変わらないものと考えてしまう。人間性を画一的なものとしなしたとたん、自分の可能性をみずから限定することになる。

しかし、中国の思想家なら、人は単一の均質な存在ではないし、そのようにとらえるべきではないと言うはずだ。たとえば、きみが自分のことを短気で怒りっぽい人間だと思っているとする。「まあ、これが自分だから」とひらきなおって、ありのままの自分を受け入れるようなことはすると、本書の思想家たちはたしなめるはずだ。いずれわかるように、たぶんきみは生まれつき怒りっぽい人間ではない。おそらく、たんに行動がパターン化してしまい、自分の思う自己像がそのまま自分の特徴になるのを受け入れてしまっているだけだ。もともときみは、怒りっぽくなりうるのと同じだけ、たとえば温和になったり寛大になったりする可能性を秘めている。

中国の思想家は、どの人もみんな複雑で、たえず変化する存在であることに早く気づけと説くにちがいない。一人ひとりに、さまざまな、ときに相反する感情の傾向や、願望や、世界への反応の仕方がある。わたしたちの感情は、内にはなく外に目を向けることで引き出される。世間のしがらみを断って瞑想したり旅に出たりしても養われない。日々の営み、つまり他者とかかわったり行動したりすることで実地に形づくられる。言いかえると、

ありのままの自分だけが自分なのではない。いつでも積極的に自分自身をよりよい人間へと成長させることができる。

もちろん簡単ではない。自分の力量について、そして本当の変化がいかにして起こるかについて、意識から改革しなければならぬ。また、一足飛びにできるものでもない。変化は不屈の努力によって徐々にやってくる。鍛錬を積んで視野を広げ、複雑に絡み合いながらそのときどきで状況を決定づける要因（自分の置かれた人間関係や、つき合っている仲間、就いている仕事など、さまざまな生活環境）を把握し、周囲のあらゆるものとのかわりを時間をかけて変えていくことが成長につながる。広い視野でさまざまな見地から眺めれば、ゆつくりした真の変化をもたらす行動がとれるようになる。

真の自由は自分が中核の部分では何者であるか発見することで得られるとわたしたちは教わるが、その「発見」こそ、これほど多くの人を無頓着の時代に閉じ込めてきたものの正体だ。わたしたちの行く手に立ちふさがっているのは、わたしたち自身にほかならない。

* * *

それでは、いかに生き、どう世界を秩序づけるか、根本から新たに計画しなおすことになるのだろうか。そうではなく、むしろ本書に登場する思想家は、たびたび日々の暮らし

のなんでもないことを通じて自分たちの考えを説明し、日常でこそ大きな変化が起きるのだと説いた。その例にならない、この本では日常的な例をふんだんに交えて古代の思想に命を吹き込んだ。とはいえ、思想家たちは指針を与えるために具体例を引き合いに出したわけではないし、それはわたしたちも同じだ。例を引いたのは、その多くをわたしたちがすでに実践していると示すためだ。ただし、あまりうまくは実践できていない。例にあげたような暮らしのなかのなんでもないことを振り返ってみるなかで、中国思想がいかに実用的で実践可能な考えなのかがわかるはずだ。

この本の題名(原題 *The Path*)は、しばしば中国の思想家が〈道〉と呼んだ概念からきている。道は、わたしたちが努力して従うべき調和のとれた「理想」ではない。そうではなく、道は、自分の選択や行動や人間関係によってたえまなく形づくっていく行路だ。わたしたちは人生の一瞬一瞬で新たに道を生み出している。

道には、本書のすべての思想家が賛同しただろう統一されたとらえ方というものとは存在しなかった。思想家たちはそろって当時の社会の慣習に反論したが、人がいかにして人生の行路をひらくかという点では、それぞれが大きく異なるとらえ方をした。それでも、意見が一致する点が一つあった。行路を切りひらく過程そのものが、自分と自分の生きる世界を変える無限の可能性を秘めているという点だ。